〔曲 名〕こども歳時記

一月 羽根つき

二月 麦ふみ

三月 鶯の夢

四月 梨の花

五月 夜更けのオルゴール

六月 初ぜみ

七月 山はいいなァ

八月 海の子守歌

九月 ばったとのくつわむし

十月 秋まつり

十一月 藁打ち

十二月 クリスマス

〔曲 種〕

〔作曲者〕Jiro Nkano

中野二郎

〔編 曲〕

私のこどもの歌

昭和30年の春から32年の春まで約2年間に私はこどもの歌を200曲以上書いただろう。

これはその頃CKのこどもの番組に「歌の花かご」があり1ヶ月 7、8曲はこの為に作らねばならなかった。

勿論40年近くも前に最初に作ったのが、こどもの歌であり、其の後折にふれて書いたものは数にして500曲はあると思うが最も楽しんで作ったのはこの2年間であった。

顧てもこの間のものに比較的よいものが多い。

世の中には折角作られても一度も歌われることなしに忘却の深淵に沈められて
了うものがどれだけあるかわからないのに私のは少くとも一度は放送にかけられたのだから冥すべきかも知れない。
私は歌うこどもたちを手がけていないし、又そうしようと努力したことがないから初めから深淵に沈んでいるようなものである。
それでも折角作って自分ではよいと思っているものが、そのまま消えて了うのは作者としては淋しいに違いないから「これは」と思うものは誰がみてもわかる様につとめて浄書するようにしている。
猶それだけではあきたらす自ら採点して90点以上をＡ、80点以上をＢ、それ以下をCとし、Ｃは始んど浄書してない。
私はそれらの中から季節を追って12曲を選んで敢えてこれに「こども歳時記」と名付けここに披露する。
全部をマンドリンオーケストラ伴奏にすることに少し無理があるが、これはこの際致し方がない。
尚このこども歳時記に採上げた歌の大半の作詞は当名古屋に昔から住む中条雅二氏である。
中条氏は永く童謡を書き続けている人でその道の人はよく知っているが、私同様余り恵まれてはいない。
これは名古屋という環境が有能な人を育てるには極めて不向な土地がらであることに大きに関係していると私は思っている。
私は昔この人と組んで「一茶さん」とゆう童謡を作り、コロナというレコード会社から出したのか意外に受けて、
他の赤字を大分埋め合わせした話をきいているが、私達はそれぞれ30円の作詞作曲料を貰って泣き寝入った思出のものである。
きくところによると信州の或るところでは芸者のお座敷唄にまでなっているという。
放送局のプロデューサーの中には小学校時代これに振りをつけて盛んに踊った人や、中には小さい時各地でこれを歌って稼ぎ廻った人もあるという。
全く作者のあづかり知らないことである。

１. 羽根ツキ　　中条雅二 作詞

追羽根ツキマショ トモコチャン

一ツチョンチョン 日ノ本ハ
日ノ出ノオ国 神サマノ
ミエマス オクニ チョンチョンチョン。

追羽根ツキマショ アキコチャン
二ツチョンチョン 富士ノ山
千年万年 消エマセヌ
ミネノ 白雪 チョンチョンチョン。

羽根ツキマショ キヨコチャン
三ツチョンチョン ミワタセバ
実リノ村ノ 金ノ波
今年モ 豊年 チョンチョンチョン。

今でも年の暮に百貨店に行けば豪華な羽子板を沢山見かけるけれど、
お正月になってこども達が追羽根するのを見たり又その音をきくことは絶えてなくなった実際今のこどもたちにとってはもっと変化に富んだ面白い遊びや、
テレビ等というものがあるのだから仕方かない。
遊びとしてならバトミントン等の方がずっと面白いのではないかと私にさえ思われる。
けれども昔の平和な時代に万才の鼓の音に混って羽根ツキの音が何処からかきこえてきたりする時のあのお正月の気分は却々いいものである。
「日ノ出ノオ国神サマノミエマスオ国」等という言葉は今のこどもには全く通用しないが、明治生れの私等には何とも捨て難い味がある。
近くの八幡さまにも殆んど参詣したことのない罰当りの私でも、新ういう言葉でスラスラと何の不思議もなく歌えた時代は倖せであったような気がする。

2.麦ふみ　　中条雅二 作詞

麦ふみや ホイ 山から ホイ

大寒小寒の 風が吹く

一畝 ホイ 二畝 ホイ

ちよく ちよく 踏んでも まだ寒い。

麦ふみや ホイ 父さん ホイ

大寒小寒で 頬かむり

一ト息 ホイ 二タ息 ホイ

ちょく ちよく 踏んでは 休んでる。

麦ふみや ホイ 畠に ホイ

大寒小寒の 霜がある

一ト畦 ホイ 二タ畦 ホイ

ちょく ちよく 踏んだら 昼御飯。

早春農家では麦の徒らな成長を押え、根張りをよくするために麦の芽を足で踏むことは昔から行なわれている。

これにはこどもたちもかり出されて手伝わされる。

霜のおりている畑にふところ手をしながら寒いのを我慢して踏んでいると段々躰も暖くなってくる。

何しろまだ寒いのだから自分で景気をつけなければならない。

だから麦を踏むことよりも寒さに耐えるためにやっている運動のようなものである。

都会に住むこども達には全く縁のないものであるからメロディはどうしても土臭くなる。

3. 鶯の夢　　相馬御風 作詞

春が来たとて 谷かげの

巣を出た 一羽の うぐいすが

桃の小枝で ひるねして

トントントロリと 夢を見た。
夢でおぼえた 歌のふし
うたえば 花が ヒラヒラ。

ヒラヒラヒラと 散る花の
色は桃色 桃の花
トントントロリと 夢に見た
五人ばやしの 歌の声。
雛の御殿の うつくしや
鶯の夢の なつかしや。

大正12年に(私の父の亡くなった年)春陽堂から出版された相馬御風の童謡集に「銀の鈴」とゆうのがある。
竹下夢二装画の可愛らしい本でこの中から私は沢山作った。
時恰も北原白秋が「赤い鳥」によって童謡運動を起こした直後で丁度私が楽器を初めて間もなく、私もこれによって多くの夢をかきたてられた。
初め楽器は笛と太鼓だけでゆきたかったので永くあたためていたが孫の初誕生にともかくまとめてみたものである。
雛祭りの五人ばやしの形で、出来れば楽器も衣装もそんな風でやってみたい等と思ったものである。
何もかもマンドリンとギターでやろうとするところに無理があるが意図のあるところは多分解って頂けるだろう。

4. 梨の花　　安藤徇之介 作詞

梨の木畑に 日がくれて
ほんのり春の 月が出た
いつか かかった 夕もやに

白い 白い 梨の花

どこかで ねんねの子守歌
夢でうたって いるような
ころころ蛙の 鳴く声に
ねむい ねむい 梨の花。

梨の木畑の 明るさは
ほんのり月の 射すひかり
小みらをめぐって どこまでも
あまい あまい 梨の花

作詞者は下田の海善寺の住職(故人)で沢山の童謡を作りその道でのベテラン。
数多の佳作がある。
CKから出した番組で「東海こどもの歌」というのがあり毎月新しいこどもの歌を作って発表しこれが三年続いた。
これはその中の一つで安西愛子さんが歌うと不思議に味が出た。
私は創作家気取りは嫌いでそういうことは殆んどしないがその時はどういう風の吹きまわしか歌詞を携えてわざわざ下呂まで出かけて行って作ったものである。
だから作曲料を貰っても勘定には合っていない。
プロデューサーは私がこれを下呂で作ったことを知っているのでしきりと「これは下呂を散歩する調子ですよ」とひやかし半分歌手に紹介していたが、下呂には梨の花はなかった。

5. 夜更けのオルゴール　中条雅二 作詞

夜更けの街に ふっている
雨はやさしい オルゴール
誰もきいては いないけど

タラン トロン タラン トロン
やさしい歌を うたっている。

夜更けの街に ふっている
雨はしずかな オルゴール
ぬれた並木の 葉末から
タラン トロン タラン トロン
しずかに落ちては うたってる。

夜更けの街に ふっている
雨はやさしい オルゴール
誰も知らすに いるけれど
タラン トロン タラン トロン
夜更けにこっそり うたってる。

ねじのゆるんだオルゴールが独り自分だけで歌っている。
ゆっくり静かに。
私が思っている程好評を得なかったけれど数ある私の歌の中でも秀逸の部に属するもの。
作った当座はどれも傑作のように思えるが時を経ると次第に本当のところが自分にも解ってくる。
この歌が好きな所以は自分だけ独り歌っているオルゴールというのが私自身の姿に似ているからかも知れない。
出版もせず従って歌われる機会もない歌。
然し自分ではよい歌だと思っているので死んでもわかるように浄書だけはしてある
「シューベルトの俤（おもかげ）があるネ」と自讃してみたらプロデューサーが返事に困って「そうですか」と笑っていた。

6. 初ぜみ

初ぜみが 鳴いているよ

柿の木の あの上だよ

みんみんみん しゃんしゃんしゃんしゃん

しゃんしゃんしゃんしゃん

　　しゃんしゃんしゃんしゃー

初ぜみの 鳴いている庭

柿の実は まだ青いよ

みんみんみん しゃんしゃんしゃんしゃん

しゃんしゃんしゃんしゃん

　　しゃんしゃんしゃんしゃー。

初ぜみを きいている庭

紫陽花も もう枯れるよ

みんみんみん しゃんしゃんしゃんしゃん

しゃんしゃんしゃんしゃん

　　しゃんしゃんしゃんしゃー。

夏のせみというのは私は好きである。

もっとも夏しか出ないが如何にも夏が来たという感じになる 永いこと地下にいて地上に出たら思い切りないて(あれはなくのではないそうであるが)直ぐ死んでゆく果敢なさ。

2、3年前蚊を退治る目的でヘリコプターが防虫剤を撒いたら蝉まで死んで了って味気なくなったことがある。

私は柿の木のある家を転々と移ったが初ぜみのなく頃の柿の実の青さをよく知っている。

この曲を作った時きれいに歌ってくれた女の子たちももう二、三人のこどもがある筈。

せみだの柿だのこどもの頃からのこれにまつわる思出はこの歌を歌うとあとからあとから湧いてくる。

7. 山はいいなァ　　吉村比呂詩 作詞

山はいいなァ 涼しいな
あつい夏でも うぐいすが
ホーホー ホケキョ とないている。

山はいいなァ 涼しいな
谷のお水も 鈴振って
チロチロ チロリン歌ってる。

山はいいなァ 涼しいな
風に吹かれて 白樺が
ユラユラ 静かに ゆれている。

作詞者は高山に住む童謡作家(故人)、この人のものも随分作曲した。
何しろ環境がよいのが羨しい。
戦争中の夏私は放送局の合唱団をつれて晩泊りで飛騨を縦断したことがある。
現在東山の植物園の近くにある合掌造りのあの家がまだ白川村にあった頃で私達はあの家で休息した。
３日がかりで山道を歩いたり庄川を小さな笹舟で下ったりして富山に出たが、目の前をさえぎるものは山ばかりで山のよさをいやという程満喫した。
昔富山の薬売りが通った道とかで案外道はよかったが岐阜と富山の県境あたりは全く人気なく太古の音に足を踏入れた心地がした。
海よりも山がいいなァと思うようになったのは、それ以来で行きたいとは思っても足の方が駄目で仕方がない。
もっとも近頃はひどく便利になって歩かないでも山に登れるしかけになってきているが、それではやっぱ面白くはない。

３. 海の子守歌　　吉村比呂詩 作詞

海はやさしい お母ァさん
静かな浜辺の 夕暮に
子守の歌を うたいます
銀のゆりかご 波の歌。

海はやさしい お母ァさん
さかなの坊や ねんねして
楽しい夢を 見るように
静かにうたう 子守歌

海はやさしい お母ァさん
沖にいさり火 ゆらぐ夜も
空にお星の 見えぬ夜も
寝ないでうたう 子守歌

私は小学校の三年の頃鉢が弱く、三河の漁村で医者をやっていた叔父の家に預けられて其処の小学校に適い一と夏を送ったので海の様子は比較的よく知っているつもりである。
その頃の交通機関は渡船(帆船)が唯一つあっただけで少し風かあると船が傾いて青い海が目の前に迫り却々恐ろしかった。
凪いでいる時は駅から二里程の距離を三時間もかかった。
私は無論その頃は泳げなかったのでいつも塩浜(廃塩田)で蟹等追って遊んでいたが、却って泳げる漁師のこども等がよく溺れた。
先日遊びに行ったらその頃私に助けられて命を拾ったという男が礼に来た。
私はその男の顔は思い出せたが助けた覚えは全然ない。
明治の終りの頃の話。
今でも海岸には溺れたこどもの冥福を祈る石地蔵が立っている。

9.ばったとくつわむし　中条雅二 作詞

まつ蟲 チンチロリンと マンドリン
鈴蟲 リーラン リーラン バイオリン
そこへヒョコヒョコ 飛び出して
こわれたセロ弾く くつわむし
ガッチャン ガチャ ガッチャン ガチャ
これではこおろぎ 歌えない

まつ蟲 チンチロリンと マンドリン
鈴蟲 リーラン リーラン バイオリン
何度調子を 合わせても
こわれたセロでは なおらない
ガッチャン ガチャ ガッチャン ガチャ
これではお歌が うたえない。

ところへ ばったが飛んできて
セロに合わせて 歌い出す
歌のうたえぬ ばったには
こわれたセロでも 苦にやならぬ
バッタン バタン ガッチャン ガチャ
バッタン バタン ガッチャン ガチャ。

八月も終りに近づくと海では潮騒の音が高くなり人影もまばらになる。
あちこちでこおろぎのなくのに気付くと俄（にわか）に溜った夏の宿題が気になるというのは今のこどもたちもおそらく変りないだろう。
虫の歌といえば私の頃は文部省唱歌の「あれまつ虫がないている」というのしかなかった。
大して出来のいい歌とは思えないが永年歌い継がれて馴染むと批判を越えた各人各様の思い出がこれにからまって捨て難いものになって了う。

歌というものはどうもそういうものらしい。

だから残したいと思えばPRする機会を沢山作らねば駄目。

実際いい作品だと感心するようなものでも一向に歌われないものもあるし、くだらないものでも盛に歌われているものもある。

10. 秋まつり　　中条雅二 作詞

お祭だ お祭だ ピーヒャララ ピーヒャララ

鎮守の宮では笛がなる

あの子は振袖 赤い帯

風船ならして うれしいな

ホィ やれそれ 豊年 ピーヒャララ

八幡さまにも店が出る

お祭だ お祭だ ドンドコドンドンドコドンドン

田甫の向うで なっている

あの子はおかっぱ 畦（あぜ）の道

わた菓子たべたべ かけていく

ホィ やれそれ 豊年 ドンドコドン

隣の村でも 秋まつり

お祭だ お祭だ ヒュードンドン ヒュードンドン

風まではやして 吹いてくる

あの子ははちまき 赤い獅子

拍子木ならして とんでくる

ホィ やれそれ 豊年 ヒュードンドン

お宮の幟（のぼり）が 立っている。

終戦後間もなく私は岐阜県の或る山に囲まれた村の音頭の作曲を依頼されたことがある。
雨乞いに霊験あらたかなお宮があり、出来ればそこに伝わる神楽囃子（ばやし）を採り入れてほしいというのでこれを採譜した。
この曲の前奏はこのメロディの一部である。
私の母のさとは三河の豊川にあり、そこのお宮は毎年のお祭りに奉納の手筒花火で賑う。
私も小さな法被（はっぴ）を着て手製の手筒花火をあげた。
宮の入口には二竿の幟が風にはためき道の両側は風船やわた菓子の店がすらりと並んで昼間から打上げ花火が間断なくあげられる。
大人は朝から酒で顔を真赤に染め、こどもたちも晴着を着てとても家の中等にぢっとしてはいられない。
全く絵にかいたようなお祭風景であったが、これももう久しく出逢わない。

11. 藁打ち　　中条雅二 作詞

トントン トトンコ トントントン
納屋では朝から 藁を打つ
父さんお背なが 寒ないか
トントン トトンコ トントントン

トントン トトンコ トントントン
昨日も今日も せい出して
藁打つ木槌が 重ないか
トントン トトンコ トントントン

トントン トトンコ トントントン
表の戸を打つ あの風は
今夜は霙（みぞれ）に なりやせぬか

トントン トトンコ トントントン

藁打ち仕事などはおそらく農家の仕事の中では最も軽い労働であろうが肉体労働には全く弱い私等ではものの五分も続くまい。

私はこの歌で思出すが20数年昔２里程ある田舎からギターを習いに来た農家の青年のことである。

雨が降っても風が吹いても又どんな寒い日でも自転車に乗って来た。

余程荒仕事をやっているとみえて手等はおよそ楽器を手にするような手ではなかった。

村の青年の気風は酒でものんで女遊びをするのが一人前とされてその男だけは全く異端者扱いをされていた。

家人がうるさいので皆が寝入ってから冷え切った土間で練習するので冬等は下半身が凍えてしまうといっていた。

それだけなれば私は忘れたかも知れないが、残念なことに世にも稀な不器用さで、八小節の宿題が一週間では仕

上がらないのである。

私も何とかして覚えて貰いたかったが二年程続けて両方ともサジを投げてしまった。

この曲を初めて放送に出した時実感を出そうと打楽器奏者に実際に藁を木槌で打ってリズムを刻んで貰ったが、

叩く度に藁が机からずり落ちるのであわてて拾っては叩いていた。

それが滑稽で歌うこどもたちがおかしがるので困ってしまった。

12 .クリスマス　　中条雅二 作詞

静かな夜です イエスさま

静かな夜です イエスさま

お空のお星も またたいて

何やら お話 しています。

燈りがもえますイエスさま

灯りがもえますイエスさま
森では 小鳥も リスたちも
今夜は寝ないで いるでしょう。

静かな夜ですイエスさま
静かな夜ですイエスさま
みんなで歌えば どこからか
やさしいお声が きこえます。

クリスマスになると日本では讃美歌一つ歌ったことのないような人たちまでがのんで踊ったり騒いだりする。
こどももクリスマスケーキをねだり、親父も平常の不心得をこんなことでお茶を濁ごしておこうとする変テコなクリスマスである。
私はもともと信仰心のうすい男でどちらにも傾かないが、本当のクリスマスは敬虔なものだと思っている。
こどもの頃日曜学校に行ったことがある。
教会のクリスマスにも出逢ったが信者同志の贈り物の交換がこども心にも余りよい印象を与えられていない。
この曲はクリスマスとはこんなものだろうという私のイメージである。

マンドリン古典合奏曲集26集より